

「先祖代々の宗教」を決めたのは、誰か？

(御先祖から伝わってきている宗教は、果たして本当に御先祖の意志が尊重され、正しく選択された宗教なのでしょうか)

現在、日本人の多くが「先祖代々から受け継いでいる宗教を守る事が先祖を大切にすることになる。」と認識しているようです。

しかし、その歴史を紐解くと先祖の意志や、代々の守るべき宗派も、全く別の処にあった事が見えてきます。

つまり、「寺請制度」「檀家制度」という江戸幕府による宗教政策や、人身掌握のために強制的に寺の檀家にさせられた時代背景があったからです。

「檀家・寺請制度」【ま、江戸幕府のキリスト教の追放に端を発します。

1612年、初代将軍 徳川家康は、キリスト教の「禁教令」とキリスト教から仏教に改宗させる「宗門改め」を発令した。この法度に強く反発し、起こったのが島原の乱です。さらに幕府は、全国の諸藩に「宗門改め役」を設置し、キリスト教を改め仏教徒として寺院に所属

しているという証明書として「寺請状」「宗旨手形」を設けて、その寺院の檀家になることを幕府権力で強制するものでありました。

これが「檀家・寺請制度」であります。これにより庶民は、信仰意志とは無関係に、強制的に近隣の寺院に所属することが社会制度として義務化され、宗旨替えが禁止され特定の主派を代々にわたって受け継ぐ寺の檀家になったのです。現在先祖代々から受け継いでいる宗教を守っているのではなく、逆に先祖から「信仰の自由」が保証されている現在、御先祖がしたくても不可能だった宗教の選択の自由を取り戻して子孫のあなたが正しい宗教を選び信仰に励む事は、何より御先祖への御供養となるのです。